



のすとらだむす



君の耐精はエントロピーを  
減らす3

「やあー！いつもありがとうー！君の働きで僕も助かってるよー次に任せたい女の子はちよつと気が難しい女の子なんだけど、要領のいい子だからきつと満足してくれると思うよー！」

「それじゃあ今日もお願ひするよー！」

そして、またしばらくして…

インターホンが鳴った。

ドアを開けると見滝原の制服を着た黒髪の女の子が立っていた。

「あの……こんばんは。  
きゅうべえに言われて、ここに来ました。  
……あってますか？」

後ろから、きゅうべえがひょっこり現れた。



「やあ、ちゃんと三日間射精を  
我慢してくれてありがとう。約束通り、  
女の子を連れてきたよ。  
この子は曉美ほむら。遠慮せず好き放題、  
彼女の体内に君の精液を放出してくれ。」

ほむらは俺の顔をじっと見つめながら、  
ゆっくりと膝立ちになった。  
そして、彼女は俺のスボンとパンツを  
一気に下ろした。

びろんっ！

三日間我慢したせいで、限界まで充血した  
俺のおちんちんが、  
勢いよく飛び出して、ほむらの目の前で  
びくびくと跳ねた。



ほむらは少し目を細め、  
小さな手を伸ばして、根元をそっと握った。

「ふふ……すごい……熱い……」

三日間我慢したから、

こんなにパンパンに腫れてる……♡」

彼女は悪戯っぽく微笑むと、

俺の先端に顔を近づけ、熱い吐息を吹きかけた。

「では……しゃぶらせていただきますね、

お兄さん……」

ちゅっ……。

柔らかい唇が、亀頭に  
優しくキスをした。

そのまま、ほむらは

ゆっくりと口を

開き、

俺のおちんちんを

温かい口腔に

迎え入れた。

じゅぷっ……れる……

じゅるるっ……。

はー♡

れっ♡れっ♡

ちゅっ♡ちゅっ♡

はあー♡

「うわっ……！」

ほ、ほむらちゃん……！」

ほむらの口の中は

信じられないほど熱く、ぬるぬるだった。

小さな舌が裏筋を這い回り、先端の鈴口を

チロチロと刺激する。

彼女は頭を前後に振りながら、

時々喉の奥まで深く咥え込み、

「んぐっ……じゅぽっ……んっ……♡」

と卑猥な水音を立ててフェラチオを始めた。

俺は腰が浮きそうになるのを  
必死に堪えながら、

ほむらの頭に  
手を置いた。

ほむらは

一度口を離し、

糸を引く唾液を

舌で舐め取り

ながら、

上目遣いに俺を見た。

じゅぽじゅぽじゅぽっ！

れっ  
れっ  
れっ

はっ  
はっ

ちゅ  
ちゅ  
ちゅ  
ちゅ

はあ  
はあ

れろれろっ！

んぐっ……んっ……♡

俺はもう、立っているのも辛いほどの  
快感に襲われていた。

ほむらの小さな口が、俺の欲望を

貪欲に吸い上げていく。

「ほむらちゃん……やばい……イキそう……」

ほむらは口を離さずに言う、

「じゃあ……こっちで、たっぷり出してくださる……」

彼女は立ち上がり、俺の目の前でぬてくると  
服を全て脱いだ。

すでに愛液で  
ぐしょぐしょに

濡れた秘部を

指で広げ、

俺を誘う。

「では……

ここに……

全部出してください。

私の奥に……

三日分の精液を……注いで？」

ほむらはベッドに

仰向けになり、

脚を大きく開いた。

俺は我慢の限界に達したチンポを、

彼女の濡れた入り口に押し当てた。

ずぶっ……ぬぶっ……

ずずずずっ……!!

「あああっ……!!

熱い……太い……!!」

んあ……  
ああ……

ああ……  
ああ……

んあ……  
ああ……

んあ……  
ああ……

ほむらは眉を寄せ、甘い喘ぎ声を上げた。

狭くて熱い膣内が、  
俺のチンポを

きつく

締め付けてくる。

「んっ……」

あっ……

はあんっ！

すごい……！！

俺はほむらの脚を掴み、

激しく腰を振り始めた。

フェラで限界まで

昂ぶっていたせいで、

最初から激しいピストンに

なってしまう。

ずんずんずんっ！

「はあんっ！ あっ、あっ、ああんっ……」

奥……子宮に当たってる……！！

気持ちいい……！！

んあ……  
ああんっ……

んっ……

んっ……

クールな表情が完全に崩れ、  
蕩けた淫らな顔で俺を見つめる

「あんっ！」

「あっ、あっ、  
はあんっ！」

「すごい……」

「三日分……」

「全部……」

「私の子宮に  
……ぶつけて……」

俺はもう限界だった。

我慢した分が一気に噴き上がった。

「ほむらちゃん……もう……おん……」

「出して……」中に……」

「ああんっ！ 熱いの……」

「いっぱい……子宮に注いで……」

「どぴゅん……」

「どくっ！ どくっ……」

「びゅん……」

「ん……」

「あ……」

「ん……」

「ん……」

「ん……」

「ん……」

俺はほむらの奥深くに、

三日分溜め込んだ

大量の精液を

勢いよく

中出しした。

ほむらは

全身を激しく

痙攣させ、

俺にしがみつき

ながら絶頂を迎えた。

「んあああっ——」

熱い……！ いっぱい出てる……！

子宮が……精液で……いっぱい……！

あっ……あっ……イク……

イツちゃう……！」

ほむらは精液を最後の一滴まで

搾り取るように瞳を締め付けた。

「ふふ……三日分……

全部、受け取りました……

まだ……出せますよね……？」

んあ……  
ああ……

んあ……  
ああ……

んあ……  
ああ……

んあ……  
ああ……

……どれくらい時間が経っただろう。  
ほむらはベッドの上で、  
ぐったりと息絶え絶えになっていた。  
彼女の黒髪は汗で、  
額や頬に張り付き、  
目は虚ろで焦点が合っていない。  
口からは荒い息と  
小さな喘ぎの名残が漏れ、

白い太ももは  
俺の精液でべっとりと  
濡れ、シーツの上に  
大きな染みを作っていた。

「はぁ……はぁ……はぁ……」  
ほむらは力なく、  
掠れた声で呟いた。

「もう……動けない……  
子宮……いっぱい……熱い……  
あなたの精液で……お腹……パンパン……」





彼女はゆっくりと下着と制服を拾い上げ、  
着替え始めた。  
しかし脚の内側を伝う精液を拭う  
動作すらおぼつかない。  
ほむらはスカートを直しながら、  
掠れた声で呟いた。



彼女はドアに向かいながら、  
背中越しに小さく微笑んだ。  
「今日はありがとうございました……」  
ドアを開ける直前、ほむらは少しだけ振り返った。  
「……お兄さん。  
また来ますね……」  
さようなら……」  
そう言って、ほむらはふらふらと部屋を出て行った。

# プールイチャラブデート・美樹さやか編

俺はあの謎の生物と契約して女の子達と  
エロい事をしまくっているのだが、  
今日はさやかちゃんとプールに来ていた。  
今日も彼女は水着姿で俺の隣を歩きながら、  
元気よく笑っている。

「えへへへ、お兄さんとプール来るのって  
初めてだよな！どう？私の水着、可愛い？」



さやかは鮮やかな  
青のビキニを着ていて、  
健康的で引き締まった体に  
ぴったりと張り付いている。  
控えめながらも形の良い胸と、キュツと上がった  
お尻が強調されていて、  
俺はさつきから目を逸らすのに必死だった。

「可愛いよ……すごく似合っている」  
「ふふん、素直じゃん」  
さやかは俺の腕に絡みついてきて、  
水の中でじゃれ合うように体をくっつくっつけてくる。

濡れた肌が密着し、彼女の太ももが俺の脚に  
触れるたびに、心臓の音がうるさくなる。  
イチチャイチヤしながら、周囲の視線なんて気にせず、  
二人だけの世界を楽しんでいた。  
しかし、限界が来た。  
さやかちゃんが俺の背中にぴったり  
くっついておっぱいを押し付けられた。



股間が水着の中で完全に  
勃起してしまった。

「……あっ」

さやかもそれに気づいたらしい。

彼女は俺の耳たぶを軽く甘噛みしながら、  
小声で笑う。

「んんん……お兄さん、元気になってるじゃん。

私のせい？」

「さやかちゃんが可愛すぎるから……」

「ばか♡……」

シャワー室へ空いてるみたいだし……行いませ」

彼女は俺の手をそっと握り、周囲の目を気にしながらも、プールサイドの端にある個室シャワー室へ連れて行った。

ドアを開けてロックすると、さやかちゃんは俺にぴったりと寄り添ってきた。

「ここなら、二人きりだね……♡」

さやかちゃんは俺の胸に自分の体を預け、青いビキニの胸を優しく押しつけてきた。

柔らかくて温かい乳房の感触が、濡れた布越しに心地よく伝わってくる。

俺たちは自然とキスを交わし、

乳を揉みながら、ねつとりと舌を絡め合った。

ちゅっ……れろっ……はあ……ちゅぱっ……♡

しばらくイチヤイチャと乳揉みを楽しんだ後、

さやかちゃんは俺の耳元で甘く囁いた。

「んっ……お兄さん、

もうこんなに熱くなってる……♡」

彼女はシャワーの壁に背中を預け、いびきニのボトムを横にずらした。

片足を軽く浮かせて俺を誘う。

「ここ……入れて……」

さやかのおまんこに……

お兄さんの熱いの……

いっぱい注いでほしいな……」

ずぶっ……ずんっー!!  
「あああんっ♡ 入ってきた……!!」  
お兄さんの……奥まで「一気に……!!」

だめだめ  
ちゅっ♡

さやかちゃんは壁に手をついたまま、  
背中を仰け反らせて甘く喘いだ。  
俺は腰を激しく前後に振り、  
バックから深く突き上げ始めた。  
ぱんっ! ぱんっ! ぱんぱんぱんっー!!  
「はあんっーあっ、あっ、ああんっー!!」

んっ♡  
んっ♡

ぱんっ♡  
ちゅっ♡

ぱんっ♡  
ちゅっ♡

ぱんっ♡  
ちゅっ♡

すごい……奥が……ガンガン当たってる……!!  
お兄さんの……  
さやかのおまんこを……  
めちやくちやにしている……♡」

彼女の健康的な尻が、  
俺の腰に激しくぶつかるとたびに波打つ。

俺はさやかちゃんのを強く掴み、  
容赦なくピストンを加速させた。  
ぐちゅぐちゅぐちゅっ!!

だめだめ  
ちゅっ♡

「んああっ! あっ、あっ、はあんっ!!」

んっ♡

奥……子宮に……直接当たってる……!!

気持ちいい……お兄さん……

もつと……激しく突いて……!!

あんっ! あっ、あっ、あああんっ!!」

さやかちゃんは壁にしがみつきながら、

背中を激しく仰け反らせて喘ぎ続けた。

んっ♡

ばっ♡  
ちゅ

ばっ♡  
ちゅ

ばっ♡  
ちゅ

青い髪が乱れ、背中が汗で光っている。

俺は片手で彼女の胸を揉みしだきながら、

もう片方の手で腰を掴んで

さらに深く突き上げた。

「さやかちゃん……気持ちいいよ……」

「はぁんっ！ だめ……そんなに奥ばっかり……！  
あっ、あっ、はぁんっ！  
もう……イッちゃっ……！」

お兄さん……♡  
彼女の膣内が激しく痙攣し始めた。  
俺も限界を迎え、さやかちゃんの  
奥深くに大量の精液を注ぎ込んだ。  
どぴゅんぬんぬんっ……！  
どくっ……ぐゅぐゅぐゅぐゅっ……！

「ああぁんっ♡ 出てる……！ 熱い……！  
お兄さんの精液……おまんこの奥に……  
いっぱい注がれてる……！  
はぁんっ……イク……イッちゃっ……！」

だめだめ  
ちゅっ♡

んっ♡  
っ♡

ばっ♡  
ちゅっ♡

ばっ♡  
ちゅっ♡

ばっ♡  
ちゅっ♡

んっ♡  
っ♡

ぐゅぐゅぐゅぐゅっ♡  
っ♡

さやかちゃんは壁に手をついたまま全身を激しく震わせ、長い絶頂を迎えた。

溢れた精液が彼女の太ももを伝って滴り落ち、シャワーの床を白く汚した。彼女は息を荒げながら、ゆっくりと振り返り、俺に寄りかかってきた。

「はあ……はあ……お兄さん……すごかったバックで……めちゃくちやに突かれて……頭真っ白になっちゃった……」

さやかちゃんは俺の胸に顔を埋め、甘えた声で囁いた。

「フルデートなのに……こんなエッチなことしちゃって……でも……すごく嬉しかった……また……デート……しようね？」

べっぴん♡♡♡

ばっ♡♡

ばっ♡♡♡♡

ん♡♡♡♡

# プールイチャラブデート・佐倉杏子編

俺はあの謎の生物と契約して女の子達と  
エロい事をしまくっているのだが、  
今日は佐倉杏子とプールに来ていた。  
今日も彼女は水着姿で俺の隣を歩きながら、  
いつもの調子で笑っている。  
「へへっ、どうだ？ 似合ってるだろ？」  
杏子は鮮やかな赤いビキニを着ていて、  
引き締まった健康的でしなやかな体に  
ぴったりと張り付いている。

控えめながらも形の良い胸と、  
キュツと上がったお尻、  
引き締まった脚が強調されていて、  
俺はさっきから目を逸らすのに必死だった。  
「すごく似合ってる……杏子らしいな」  
「ふん、素直じゃねえか。」  
まあ、お前がそんなに見つめてくるなら、  
悪い気はしねえけどよ」



杏子は俺の腕に絡みついてきて、水の中でじゃれつくように体をくっつけてくる。濡れた肌が密着し、彼女の太ももが俺の脚に触れるたびに、心臓の音がうるさくなる。イチヤイチヤしながら、周囲の視線なんて気にせず、二人だけの世界を楽しんでいた。しかし、限界が来た。

杏子が俺の背中にぴったりくっついて胸を押し付けてきた瞬間、股間が水着の中で完全に勃起してしまった。「……おい」

杏子もそれに気づいたらしい。彼女は俺の耳たぶを軽く甘噛みしながら、悪戯っぽく笑った。

「へへっ……お前、元気になってんじゃねえか。私のせいかな？」

「杏子が可愛すぎるから……」

「すけべ野郎♡……シャワー室、

空いてるみたいだぜ、早く行けぞ……」

杏子は俺の手を引いて、プールサイドの個室  
シャワー室へ連れていく。  
ドアを閉めてロックすると、  
杏子は荒い息を吐きながら俺を押し倒した。  
「へへっ……もう我慢できねえ。  
私の上に乘ってやるよ」

俺はすでに熱く濡れている秘部に  
指を這わせる。  
愛液がとるととると溢れていた。

「杏子……もうこんなに……」

「当たり前だろ……お前が勃起してるの見たら、  
私も興奮してきちゃったんだよ……」

杏子は俺の腰に跨がり、  
すでに熱く濡れた秘部を  
俺の硬くなったチンポに押し当て、  
ゆっくりと腰を沈めていく。

ずぶっ……ぬぶっ……ずずずずっ!!  
「んああっ……!! 入ってきた……!!」  
お前の……熱くて太いやツが……奥まで……!!」  
杏子は俺の上に跨がったまま  
背中を仰け反らせて  
甘く喘いだ。  
健康的な尻が俺の腰にぴったりと  
密着する、やわらかい……

くっ……はあ……はあ……  
お前の……私の中でビクビクしてるぜ……!!」

杏子は両手を俺の胸について、腰をゆっくりと  
前後に動かし始めた。

徐々にスピードを上げ、  
激しく上下にピストンする。

ばんっ!ばんっ!  
ばんばんばんっ!!

バッ  
バッ

バッ  
バッ

「はぁんっ！ あっ、あっ、くっ……！  
奥……奥いいところ当たってる……！  
気持ちいい……お前の……最高だ……！」  
彼女は騎乗位で激しく腰を  
振りながら、赤い髪を乱れさせ、  
俺を見下ろした。  
しなやかな体が、汗で光りながら  
上下に激しく動く。

「あんっ！ あっ、あっ、あぁんっ……！  
もっと……腰突き上げて……いいよ……！」  
俺は下から腰を突き上げ、  
杏子の奥を突きまくった。  
杏子は俺の胸に爪を立て、

激しく腰を打ちつけてくる。ぐちゃぐちゃっ！  
ずんっ！ ぐちゃぐちゃぐちゃぐちゃっ……！

バッ  
ッ

バッ  
ッ



杏子は全身を激しく痙攣させ、俺の胸に倒れ込みながら絶頂に達した。彼女の膣内が俺のチンポを強く締め付け、溢れた精液が結合部から滴り落ちた。杏子は俺の上にぐったりと乗ったまま、荒い息を吐きながら笑った。

「へへへ……  
まだ……足りねえよな……？  
次は……もっと激しく……  
犯してやるからな……♡」

バ  
ッ  
ッ

ぐわんぐわん

バ  
ッ  
ッ

プールイチャラブデート・鹿目まどか編

俺はあの謎の生物と契約して  
女の子達とエロい事をしまくっているのだが、  
今日は鹿目まどかとプールに来ていた。  
今日も彼女は水着姿で俺の隣を歩きながら、  
照れくさそうに笑っている。  
「えへへ……どうかな?」この水着……  
似合ってる……?」



控えめだけど形の良い胸と、  
柔らかかそうなヒップラインがとても可愛らしく、  
俺は思わず見とれてしまった。  
「すごく可愛いよ、まどかちゃん……」  
「ほ、ほんとに……?」嬉しい……」  
まどかは頬を赤らめながら俺の腕に  
そっと絡みついてきた。  
水の中でじゃれ合うように体をくっつけてくる。  
濡れた柔らかい肌が密着し、  
彼女の太ももが俺の脚に触れるたびに  
胸が高鳴った。イチチャイチチャしながら、  
周囲の視線を気にしつつも、  
二人だけの甘い時間を過ごしていた。

しかし、限界が来た。まどかが俺の背中に  
ぴったりとくっついて、柔らかい胸を  
押し付けてきた瞬間、  
股間が水着の中で完全に勃起してしまった。  
「……あっ」  
まどかもそれに気づいたらしい。  
彼女は俺の耳元で恥ずかしそうに、  
でも甘く囁いた。



「……お兄さん……もう、いーんなに……  
私のせい……と」

「まどかがちゃんが可愛すぎるから……」

「も、もう……♡  
……シャワー室、使っているみたい……  
行」

まどかは俺の手をそっと握り、プールサイドの個室シャワー室へ連れていった。

ドアを閉めてロックすると、

彼女は俺に背中を向けて壁に手をついた。

「早く……我慢できないんでしょう？」

後ろから……私の中に……入れて……♡」

俺は後ろからまどかの

ピンクのビキニのボトムを脱ぎ、

すでに熱く濡れている秘部に指を這わせた。

愛液がとるとると溢れていた。

「まどかちゃん……もうこんなに……」

「だって……お兄さんが……」

興奮してるの見たら……」

まどかも……熱くなっちゃった……」

俺は水着を下ろし、硬くなったチンポを彼女の入り口に押し当てた。

そのまま腰を進め、一気に奥まで埋め込んだ。

ずぶっ……ずんっ！  
「んああっ……！入ってきた……♡  
お兄さんの……熱くて……太い……！」  
まどかは壁に手をついたまま、  
背中を仰げ反らせて甘く喘いだ。

俺は彼女の細い腰を掴み、  
激しく腰を動かした。  
ぱんっ！ぱんっ！ぱんぱんぱんっ！

まはあう

お兄さんの  
ぱちゅ♡

ぱちゅ♡

「はあんっ！あっ、あっ、ああんっ！  
奥……奥が……気持ちいい……！  
お兄さん……もっと……激しくして……♡」  
まどかの柔らかい尻が俺の腰にぶつかるたびに、  
波打つように揺れる。  
彼女の濡れたピンクの  
髪が背中に張り付き、甘い声がシャワー室に響く。

「んっ……！ あっ、あっ、はあんっ……！  
お兄さんの……大好き……  
私の中……いっぱいにして……！」

俺はまどかの腰を引き寄せながら、  
さらに深く激しく突き上げた。

ほっ♡ちゅ♡

はっ♡あ♡う♡

お兄♡の♡  
ばち♡♡

ほっ♡ちゅ♡

「ああ……中へずいぶん気持ちいい……！」

「はあんっ……！ あっ、あっ、あああんっ……！  
私……もう……イツちゃっ……！……！  
お兄さんも……一緒に……♡」

最後に思いつき奥を突き上げると、  
まどかの膣内が激しく痙攣しながら俺を締め付け、  
同時に大量の精液を彼女の奥深くに  
注ぎ込んだ。どぴゅるんるんるんっ！

あああああ

知

ばち♡

ぽっ♡  
ちゅ♡

なな

「んあああつ♡」

熱い！

お兄さんの精液……

中に……いつばい……

あつ……あつ……イタ……イツちゃう……!!」

まどかは壁に体を預けたまま、

びくびくと全身を震わせて絶頂に達した。

溢れた精液が太ももを伝って、

シャワーの水と混じって流れ落ちていく。

俺は彼女の背中に覆い被さるように抱きつめ、  
耳元で優しく囁いた。

「……まどかちゃん、大好きだよ」

まどかは息を荒げながら、  
後ろを向いて俺の唇に甘くキスをしてきた。

「私も……大好き……♡  
……ねえ、帰ったら……また、しよう……?」

プールイチャラブデート・巴マミ編

俺はあの謎の生物と契約して女の子達と  
エロい事をしまくっているのだが、  
今日は巴マミとプールに来ていた。  
今日も彼女は水着姿で俺の隣を優雅に歩きながら、  
穏やかに微笑んでいる。  
「ふふふ……どうかしら？」の水着、  
似合っているかしら？」「  
マミは優しい黄色のビキニを着ていて、  
豊満で美しいプロポーションに  
ぴったりと張り付いている。



形の良い大きな胸の谷間、細くくびれた腰、  
女性らしい柔らかかなヒップラインがとても魅力的で  
俺は思わず息を飲んだ。  
「すごく似合ってる……マミさん、綺麗すぎて……」  
「まあ……照れちゃうわね……」  
マミは上品に微笑みながら俺の腕にそっと絡み  
ついてきた。水の中で優しく体を寄せてくる。  
濡れた柔らかい肌が密着し、彼女の豊かな胸が  
俺の腕に当たるたびに、甘い香りと柔らかさが  
伝わってくる。イチヤイチヤしながら、  
二人だけの甘い時間を過ごしていた。

しかし、限界が来た。マミが俺の背中に優しく寄り添い、豊かな胸を押し付けてきた瞬間、股間が水着の中で完全に勃起してしまった。

「……あらっ？」

マミもそれに気づいたらしい。

彼女は俺の耳元で優しく、色っぽく囁いた。

「ふふ……あなた、もうこんなに熱くなって……私のせいかしらっ？」

「マミちゃんが魅力的すぎるから……」

「まあ……困ったわね♡」

「……シャワー室が空いているみたい。行きましようか？」



マミは俺の手を優しく握り、プールサイドの個室シャワー室へ連れていった。ドアを閉めてロックすると、彼女は俺に背中を向けて壁に両手をついた。

「早く……我慢できないんでしょっ？  
後ろから……私の中に……  
入れてちょうだい……♡」

俺は後ろからマミの黄色いビキニのボトムをずらし、すでに熱く濡れている秘部に指を這わせた。とろとろの愛液が溢れていた。

「マミちゃん……もうこんなに……」

「ええ……あなたが興奮しているのを見たら……私も、熱くなっちゃって……」

俺は水着を下ろし、硬くなったチンポを彼女の入り口に押し当てた。そのまま腰を進め、一気に奥まで埋め込んだ。

ずぶっ……ずんっ……

「ああんっ……入ってきたわ……♡

あなたの……熱くて逞しいものが

……奥まで……」

マミは壁に手をついたまま、優雅に背中を  
仰け反らせて甘く喘いだ。

俺は彼女のくびれた腰を掴み、激しく

腰を動かし始めた。ばんっ！ ばんっ！

ばんばんばんっ！

「はあんっ！ あっ、あっ、ああんっ……

奥……奥が……気持ちいい……！

もっと……深く……突いてちょうだい……♡」

マミの豊かな胸が前後に激しく揺れ、

濡れた金色の髪が背中に

張り付きながら甘い喘きを漏らす。

ああんっ♡

おんおん

ズン

ズン♡

バス

あーんっ  
あーんっ  
あーんっ

おっ  
おっ  
おっ

ズ  
ズ

ズ  
ズ

「んっ……! あっ、あっ、はあんっ……!  
……すいっわ……  
中を……めちゃくちゃに……!」

俺はマミの腰を引き寄せながら、  
さらに深く激しく突き上げた。

「マミちゃん……気持ちいいよ……!」

「はあんっ! あっ、あっ、ああんっ……!  
私も……もう……イツちゃいっしょ……!  
あなたと……一緒に……!」

バス

最後に思いっきり奥を突き上げると、  
マミの膣内が激しく痙攣しながら俺を締め付け、  
同時に大量の精液を彼女の奥深くに注ぎ込んだ。

どぴゅんぬんぬんっ……

「あああんっ♡ 熱い……!!」

あなたの精液……中に……いっばい注がれて……!!  
あっ……あっ……イク……イッちゃっ……!!」

ああん♡

おんおん

ブ

おんおん

バス

おんおん

マミは壁に体を預けたまま、  
全身を優雅に震わせて絶頂に達した。

溢れた精液が太ももを伝って、  
シャワーの水と混じって流れ落ちていく。

俺は彼女の背中に覆い被さるようにつぎつぎ、  
耳元で優しく囁いた。

「……マミちゃん、大好きだ」

マミは息を荒げながら、後ろを向いて

の唇に優しくキスをしてきた。

「私も……大好きよ……♡」

……ねえ、帰ったら……」

また、たっぷり愛してくださいさるっ？」

































